

Title	福澤先生と巴里(一)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.3 (1934. 11) ,p.64(410)- 64(410)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19341100-0064

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福澤先生と巴里 (一)

福澤先生が文久二年(一八六二)幕府の遣歐使節に隨行してマルセーユに上陸されたのはその三月五日のことであつた。それから七日にリヨンに到着し、九日の夜六時にパリに入り、ホテル・ド・ロウブル(オテル・ド・ルーヴル)に止宿された。先生の「西航記」に依ると十七日に病院を參觀し、十九日廿日にレオン・ド・ロニイ(後のパリイ東洋語學校日本語教授)に會ひ、廿八日にロニイの案内で禽獸草木園(Jardin des Plantes)を訪ひ、四月一日に退京、カレーを經、ロンドンに向つてをる。ロニイは更に一行の後を追ひ、使節のオランダ逗留中(五月十七日—六月廿一日)政府の命を受けてヘーグに滞在すること廿日間、後母の病を聞きパリに歸つたが、使節一行を追ひて再びベルリンに至り、使節の既に出發後なりしを以て露都に之を追ひ、七月二十二日に福澤先生を旅館に訪ねてをる。福澤先生は、巴里からペトログラドまで大枚四百フランの汽車賃を投じて唯日本人を見るためについできたロニイが不思議でたまらず、その「西航記」中にロニイのことを「歐羅巴の一奇士と謂ふべし」と記されてをるが、當時の東洋學者中極東方面のことに明るく日本、支那、アメリカ等について盛んに玉石混淆の著書論文を出版してゐた羅尼にとつて、政府のミッシェンで使節を露都まで追ひ日本語研究の一助とすることは好い機會であり、かつ日常茶飯事であつたに相違ない。當時此の珍客を迎へて各國はその日本學者を動員し、オランダはホフマンが接待し(尾蠅歐行漫錄三「遣外使節日記纂輯二」、三九二頁及び三三二頁)フランスではロニイが佛國外務省の返書を日本譯したり、しきりに斡旋してをる(歐行記二「前引書三」、一八四頁)。福澤先生がロニイに贈られた和歌をロニイはその外國語學校の教科書日本文集 *Recueil de textes japonais, Paris 1863* に收めてをることは既に人の知る所で(長沼賢海氏「佛蘭西に於ける昔時の日本學」歴史と地理、二十一卷、二五頁「福澤諭吉傳」、一卷三二八、三二九)、同書には亦文久二年六月六日、竹内下野守、松平石見守、京極能登守等の代言として岡崎藤右衛門といふ人が羅尼氏に宛てた手紙が載せてある。之は前にロニイが日本使節一行が巴里に再渡する時期及びその滞在期間の豫定を訊ねたのに對する返事らしい。さて一行は、八月廿九日に再びフランスに入り、夜九時巴里に着し、グラン・ドテル(Grand Hotel)に投宿してをる。先生は卅日にマデュレンの寺院を尋ね、閏八月一日に支那人唐學墳と面會し、三日にロニイに案内され圖書館を訪ひ、且つアンスタチュ・ド・フランスを見學されてをる。「西航記」に「書庫七所あり今日所見は最大なるものなり書籍百十五萬卷此書を一列に并る時は長さ七里(佛里法)なるべしと云」とあるが、此の圖書館は云ふ迄もなく今日の國民圖書館 *Bibliothèque Nationale* であり、之を訪ふたのは日本人では福澤先生が最初であつたらう。アンスタチュ・ド・フランスの方は先生も一寸理解が困難であつたと見え、同書に「學校に行く校の名をインスタチュ・デフランスと云此學校は小童の爲め設るものにあらず老先生の集合する所なり社中四十人ありて其員を増すべからず若し缺員あれば歐羅巴にて最有名なる老先生を擧て之を補ふ此社中に入るは歐羅巴にて最も難きことにて既に其員に加るときは世人に尊敬せらるること朝廷の宰相の如く第一世ナポレオン帝は此社中たり今の佛蘭西帝も社中に入らんことを望めども之を許さずと云〇インスタチュ・デフランスの學五科に分る第一語學第二歴史第三術學第四政學及理學第五技學諸先生毎日こゝに會して一科を講論す學者之を聽かんと欲するものは來るを許す云々」とある。フランスの學士院アカデミーを見たことが恐らく先生の後年日本の學士院創設に心を止められた所以であつたらう。(松本信廣)「一一八頁につゞく」